

違いを隠さずにいられる社会へ

佐賀県の中学校の生徒の作品

私には聴覚障がいがある。しかし、そのことは、ほんの数人の親しい友達と先生だけが知っている。できることなら他の人には知られたくない。なぜなら、聞こえにくさを持っていることが、「ふつう」からはずれていると見られ、私の「違い」を隠さなければならないと感じているからだ。親には、「補聴器をつけるのは、目が悪い人がメガネをかけるのと同じなんだから、気にすることはないよ」と言われる。しかし、私はどうしても気にしてしまう。見た目では分からないけれど、実は聞こえにくいということを人に知られるのが怖い。周りとは違う、そんなふうには思われたくない。だから、私は聞こえにくさを隠し、いつもなるべく「ふつう」に見えるようにと考えて行動している。

例えば、教室でのグループ活動や、先生の指示が飛んでくるような場面では、聞き逃さないようにと常に神経を張りつめている。周囲の人が突然笑い出したとき、何が面白かったのか分からないまま、とりあえず笑ったふりをしてごまかすことがある。本当は何が起きているのか知りたいのに、聞き返せず、ただ合わせるしかない。そんなとき、「また聞こえなかった」と胸がぎゅっとしめつけられる。「聞こえない自分」が目立つことは、やっぱり怖いのだ。

今、私は受験生だ。勉強することは嫌いではない。やればやるほど結果にあらわれるので、努力を続けることは苦ではない。これまでも、つまずいたときは自分なりに工夫して乗り越えてきた。しかし、どれだけ努力を重ねても、どうにもならない壁がある。それが、英語のリスニングテストだ。

私の難聴は、高音域が特に聞き取りづらいという特徴がある。英語は日本語よりも高音域の音が多く、音がつながったり消えたりするため、私にとっては非常に聞き取りづらい言語だ。話されている内容が所々抜けて聞こえるため、意味を正確に理解するのがとても難しい。

私は学習面で他の人に遅れをとらないよう、努力を重ねてきた。小学校六年生するとき、母は、英語のリスニングで私が苦勞すると考え、英会話ラジオを聴くよう勧めてくれた。それ以来、私はラジオを毎日聴き続けている。継続することは苦ではなく、むしろ楽しいと感じる。しかし、これだけ毎日努力しているのに、リスニング力が伸びている実感がないのは、とても辛い。努力すれば報われると

信じてきた私にとって、この壁はあまりにも高く、悔しきでいっぱいだ。

リスニングの音声は、私には少しかすれて聞こえる。言葉の一部が抜けてしまうと、文の意味全体がつかめなくなる。試験中は「聞き取らなきゃ」とあせるほど、集中できなくなる。周りの人は何気なく聞き取っているように見えるのに、自分だけが取り残されているような気がして辛くなる。

高校入試では、リスニングテストの免除という制度はないと聞く。席を前の方にしてもらったり、音量を上げてもらったりという配慮はあるかもしれない。しかし、それは健聴者とまったく同じ条件とは言えないと思う。私にとっては、たとえ音を大きくしても、聞き取れない音は聞き取れないままだからだ。その状態で点数をつけられるということは、正直なところ不公平だと感じる。大学入試ではリスニングテストの免除制度があると聞いた。しかし、その場合はリーディングの点数が二倍になるという仕組みで、それもまた平等ではないように思う。制度があるだけましだと考える人もいるかもしれないが、私からすれば、どの制度にも「本当の公平さ」は足りていないように思える。

私は以前、配慮を受けることにうしろめたさを感じていたことがある。「こんな配慮を受けて、私はズルをしているのではないか」とさえ思った。その気持ちを親に打ち明けたとき、「それは合理的配慮って言うんだよ」と教えてくれた。私はそのとき、初めてその言葉を知った。合理的配慮とは、その人が持っている力を正しく発揮できるようにするために、必要な助けをすることだ。合理的配慮を受けることは決して特別なことではない。私は、それがあたりまえのこととして受け入れられる社会になって欲しい。

今の私は、聴覚障がいについて堂々と話すことはまだできない。しかし、これから先の人生でずっとごまかしていくことが正しいとは思わない。自分の困難を受け入れ、必要な配慮をきちんと伝える勇気を持つと同時に、他の人が求めている配慮にもきちんと耳を傾けられる人でありたい。そして、障がいがあっても、それを隠さずにいられる社会に、誰もが自分の「違い」を隠すことなく、互いに認め合えるようなやさしい世の中になってほしい。